

- 6 堀口純子「日本語教育と会話分析」1997 くろしお出版 p.42
- 7 同上
- 8 水谷信子「あいづち論」『日本語学』 第7巻 第13号
- 9 2者以上の談話における話者交替の順番取りのこと。
- 10 山田：スミスさんのお仕事は。
スミス：英語の教師です。
山田：そうですか。お国は。
スミス：アメリカです。

『入門日本語』

- 森：ロペスさんはわせだの学生ですか。
ロペス：ええ、そうです。森さんは。

『TOTAL JAPANESE』

参考文献

1. 国立国語研究所 1983「談話の研究と教育 I」
2. 国立国語研究所 1988「話しことばのコミュニケーション」凡人社
3. 国立国語研究所 1989「談話の研究と教育 II」
4. 西原鈴子1991「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』第10巻10号
5. 堀口純子1990「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号
6. 堀口純子1991「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻10号
7. 堀口純子1997「日本語教育と会話分析」くろしお出版
8. 水谷信子1980「中・上級の話し言葉の教育」日本語教育指導参考書7『中・上級の教授法』国立国語研究所
9. 水谷信子1988「あいづち論」『日本語学』第7巻13号
10. メイナード・K・泉子1993「会話分析」くろしお出版
11. メイナード・K・泉子1997「談話分析の可能性」くろしお出版
12. 渡邊亜子1996「中・上級日本語学習者の談話展開」くろしお出版

日本語学習者の談話展開における流暢さの要因（栗山）

相手に埋めてもらう。聞き手は、話し手の言わない部分を先取りして埋めていく。こうして一つの談話が構成されていく。そのためには相手の言うことを十分に理解して、その先まで読める言語能力が必要となる。

上記のような相互関係はインフォーマルな場合に多く、ラジオ談話室のなどはそのよい例である。談話というのは、お互いに会話を楽しむことが条件である。特にその談話がラジオやテレビ等の公共の機関でなされ、電波で多くの人にさらされる場合は、不特定多数の聞く人見る人を楽しませることが期待されている。聞いていて心地よいスピードと滑らかな会話の運び、それに加えて内容の伝達が要求される。ラジオ放送で流れたK, H, M, 3名の会話では、アナウンサーとの対話の中に本論で述べた滑らかさの要素が含まれており、全く違和感のないコミュニケーションが成立していた。

初級から中級・上級へ進むにつれての日本語能力の目標は、正確さから滑らかさへの教育である。この滑らかさの教育には、単に文構造や語彙の意味・用法の技能だけではなく、日本語の会話特有のさまざまな要素をも考慮に入れる必要がある。各項目の初級段階からの対処の仕方に加えて、特に本論4で述べた中・上級での話し手と聞き手の役割を習得することが会話展開での流暢さを助ける大きな要因となっていると考えられる。

注

- 1 森田良行「談話の研究と教育」1988 国立国語研究所 p.143
- 2 因・市丸・栗山「中級学習者の話し方の問題点とその指導法に関する考察」1993
九州大学留学生センター紀要第5号
- 3 水谷信子「中・上級の教授法」1980 国立国語研究所 p.57
- 4 九州大学留学生センターにおける日本語学習者
- 5 出身国, 日本在住期間, 放送番組名, 放送局
K: スリランカ 1年 アジアクロスロード RKB
H: バングラディッシュ 4年 アジアクロスロード RKB
M: タンザニア 10年 ラジオ談話室 NHK

5. おわりに

日本語学習の到達目標は、各レベルに応じての文構造、語彙知識及び表現等を目安としている。中・上級に進むに従って文章としては、構造面での帰結関係及び微妙な語彙の用法の違い等が指導項目として取り上げられている。しかし、このような構造シラバスのみでは会話能力の向上やコミュニケーション能力を支えることは不可能である。会話能力の向上に関しては日本語独特の言い回しや特徴を取り入れた談話練習が必要となる。

今回の資料で、3-1から3-6までの項目における問題点に関しては日本語が未熟の初級学習者も含み、全学習者の傾向として各問題への対処の仕方が会話の流暢さに大きな影響を与えるということが分かった。

会話文は短い文の集まりであるため、高度な文型はあまり必要ではない。しかも語彙の不足は言い直し、聞き直し等で補充できるため、初級の学習者でもある程度文型を習得していれば上手な談話展開にもっていくことができるのではないだろうか。

談話が一つの糸を撚り合せるように展開していくという基盤にたてば、会話の流暢さを支える最も重要な要因は、話し手と聞き手の共同作業にあると言える。また言語の技能が優れていることと談話展開が巧みであることは必ずしも一致するわけではない。流暢な話し方と言え、流れるように澁みなく話す能弁さというものが一般にイメージされやすいが、談話においては話し手と聞き手の相互作用が基盤となっているから、自分の意見を完全に相手に通じさせることのみを目標としたコミュニケーション能力だけでは円滑な会話は成功しない。話し易い対話者というのは、話し手の言わんとすることをすばやくキャッチして、タイミングよく応答し、少しずつ自分の意見を述べる術をわきまえた者であろう。

日本語の話し方には相互依存の傾向が強い。特に会話においてはその特徴が顕著である。話し手は、言いたいことを全部一人で言わずに、少し残して

4-3. 話し手と聞き手の役割交替

話し手は話を最後まで言わず残しておき、その部分を聞き手が上手に引き継いで役割を交替し、今まで聞き手であった者が話し手となる。会話は話し手と聞き手の二人で行なう共同作業である。turn-takingが上手で引継ぎがスムーズに行なわれているということは、文末で自分の役割を相手に託す、リレーのバトンタッチに似ている。3名はこれを巧みに行なっている。従って対談がいかにも円滑に展開しているという印象を受ける。以下はそれが顕著に表れている例である。

(57) A：紅茶のおいしい国でしょう。

K：有名ですね。紅茶で。

(58) A：女性は何かがんばる。

H：そう、何かがんばる。学校かどこかで教える。

(59) A：日本の住宅事情は今なかなか大変。

H：大変、それに高いから、日本は。

(60) A：学生は勉強ばかり。

H：勉強ばかり、入る時も難しい、出る時も難しい。

A：日本にはアルバイトも沢山ある。

H：そう、あるから、皆学生達そうします。

(61) A：まあ、とにかく、勉強、勉強

M：でしょうね。それで、してなかったら今日はここに居なかった。

崩れる。横糸だけがしっかりして、縦糸がゆるければきれいな布が織り上がらない。K, H, M, 3名ともこの点ではアナウンサーと全く同じレベルでの会話がなされていたと言える。

(54) K: 9時から5時までずっと勉強するんですよ。その間は何か食べに行く時間とかは取れないんですよ。食べる時間も、私、そんなに

A: もったいない 勉強

K: と思って ばかりしているんですよ。

(55) A: じゃあ今は日本の夏

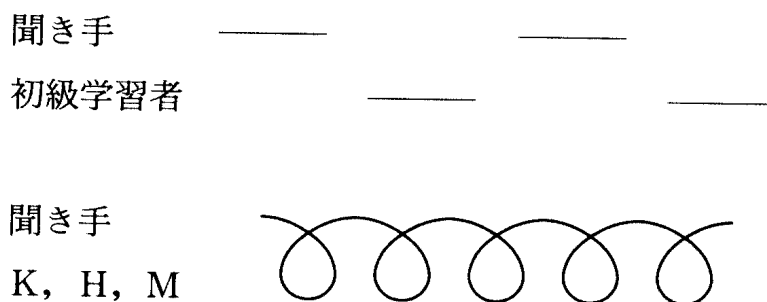
K: みたいな感じですね。

(56) A: 東京はもっと大変 だと思いますよね。

H: もっと大変

(54)から(56)は話し手と聞き手の共同作業で対話がいかにうまく展開しているかということが分かる例である。ここでは話し手と聞き手の役割交代が巧みになされており、ことばが交互に入り組んで、いわば螺旋状で会話を一つのまとまりとして盛り上げている。それに対して流暢さを欠く初級学習者の場合は両者の発話が平行線上にあり、下記の図のようになる。

会話の進行における話し手と聞き手の役割パターン



(50) A: 結婚は。

H: しました。

(51) A: じゃあ、お父さんも。

M: はい、お父さんもお母さんも元気で。

(52) A: 今まで世界のいろいろな国に。

H: そう、行った。

A: いっぱい行きましたね。

H: あっちこっち。

(53) A: だから、キリマンジャロには (笑い)

M: まだ登ったことがない (笑い)

(53)の、「キリマンジャロは」というアナウンサーの発話に、間髪入れず「まだ登ったことがない」というMの対応に二人の共有ができて笑いを誘うのである。これは話し手の省略というよりも、Mの先を推測しての先取りとも考えられる。これは一つの内容を話し手と聞き手が共同でまとめている良い例である。

4-2. 聞き手の補充

聞き手の立場から言えば、会話が進行している時には話し手の話を最後まで聞かなくても、それまでの文脈や状況で話の先を予測している。これは確実に相手の話の内容を理解し情報を共有しているからである。(52)のように聞き手は話し手が話している途中でその先まで予測して、それを話し手が言う前に先取りをして言うってしまう。これは話し手と聞き手が一つになって会話を作り上げている証拠である。この場合は話し手と聞き手が同じレベルであることが必要条件であり、一方が言語的に優位であったりするとバランスが

- (39) A : ママさん学生というのは大変でしょうね。
K : 大変です。ほんと。
- (40) A : シーズンってというのは、ずーっと同じですよ。
K : 同じです。
- (41) A : 紅茶おいしですか。
H : 紅茶おいしい。
- (42) A : 医療技術というのはまだまだ大変
H : うん、まだまだ大変。
- (43) A : 妹さんの結婚が決まりそう
決まりそう。
- (44) A : 男の子はみなサッカーですか。
M : みなサッカー。
- (45) A : そういう時は皆さんお父さんお母さんの所へ帰ってみえる。
M : 必ずみんな帰ってくる。
- (46) A : 当時はこんなに日本語が話せなかったでしょう。
M : 話せなかった。
- (47) K : 知らない人を見て笑うとか、 するんですね。
A : にこっとする
- (48) A : じゃあ、大変な毎日ですよ。
K : うーん、ですね。

S：はい，おじょうずです。

T：じゃあ，いいですね。

S：いいです。

初級のごく初期段階における学習者の話し手の言葉の繰り返しは相づち詞の「繰り返し」とは言い難い。(36)では，Sは話し手の言ったことを，先ず音声として聞き取り，それをそのまま繰り返すことによって音声と意味の一致を反芻し習得しようとしている。この過程は初級学習者の最も基本的な学習方法である。話し手の言葉を繰り返して口に出すことによって相手の言葉を確認し，その意味を自分の頭の中で模索し理解するという機能である。もう一つは，相手の言葉が聞き取りにくく，耳に響いた音を繰り返すことによって相手にその言葉の説明を要求する機能である。つまり聞き返しをしているのである。この二つはイントネーションによって区別される。後者は疑問形特有の上昇イントネーションである。例えば，教師の「ご飯を食べましたか。」の問いに対してSの「ごはん」と上昇イントネーションでの繰り返しは「ごはん」という語彙の意味の聞き返しである。初級段階の「繰り返し」はこの二つのタイプに限られており，相手の発話権の途中で打たれることはなく，相づちとしての機能はない。

「繰り返し」としての相づちは同意の機能を持つが，「ハイ」や「ソウデス」よりも，その同意の気持ちが強く，同意の強調と解釈できる。つまり会話に積極的に参加しているということが明確であり，話し手に話す意欲を与えている。また「この繰り返し」のタイプには，話し手の言葉の中から重要な語彙を繰り返す場合と文末を繰り返す場合の二つに分けられる。

(38)から(46)までは前者で(47)(48)は後者である。

(38) A：スリランカという国は日本よりもちょっと小さいですよ。

K： 小さいです。

- (35) A：地酒を、おふくろの味で、一年間の色んなことを話し合おうんですね。
ハイ、ソウデスネ ハイ ハイ ハイハイ

3-6-2. 繰り返し

相づちの表現形式の中には、話し手の言ったことを繰り返す、繰り返すと他の語句による言い換えも含むとする場合もある。これらを相づちの表現形式とするか否かは異論もあるが、聞き手は話し手の話を聞いているということが発信しているのであり、話の内容を共有しているという点から言えば相づちの一種と言える。K, H, Mは相手のことばを繰り返して話し手の文末を先取りし、自分の話にもっていき、いわゆる turn-taking^{#9}を頻繁に行ない会話を展開している。詳しくは後（4-2）で述べる。

(36)(37)は、初級の学生における教師との対話である。

- (36) T：昨日何をしましたか。
S：テレビをみて、ラジオをきいて、ごはんを、
T：ご飯を食べました。
S：ごはんを食べました。
T：寝ましたか。
S：ねました。10じぐらい。
T：10時ごろ寝ました。
- (37) T：先生は元気でしたか。
S：はい、げんきでした。
T：先生と沢山話しましたか。
S：はい、はなしました。
T：日本語で？
S：え、えいごとにはんごではなしました。
T：先生は英語はお上手ですか。

イ」という言葉を発している。それに対して後者は話し手の話が終わった段階に「ハイ、ソーデス」と言っており、この言葉は応答として捉えられる。応答は文の終わりになされ、相づちと異なり文の進行を助ける機能はない。

ラジオの対談での相づちはアナウンサーの方は多種にわたっている。女性は「ウン、ウン」「ヘー」「ナルホド」「ソウカソウカ」等、男性は「ハイ」「ホウ」「ホウホウ」「ハアー」「ウーン」「ア、ソウデスカ」等の表現を各文節ごとに頻繁にうっている。一方、Kは「ハイ」だけで殆ど打っていない。(32)の2回の「ハイ」は話し手の発話権終了時に発せられているので相づちではない。Kのことについてアナウンサーの言った内容(情報)をKが共有したいよりも「そうだ」という確認の応答と解釈できる。

(32) A：国の真ん中に山々があって、その中に水力発電がある。

K： ハイ。

A：そこで働いていらした。

K： ハイ、5年ぐらい。

(33) A：日本には沢山曲があるでしょう。

H： ソウソウソウソウ。

(34) A：日本に来て最初に福岡に着いた時に、どんなことを思いましたか

H： ウン

いろいろ、日本の習慣をみてね、何かびっくりしたり

H： ウン

Hは聞いているということは、「ウン」で、同意は「ソウ」の使い分けで相づちをうっている。K, H, Mに関して言えば、一番滞在年数の少ないKの場合、頻度も少なく「ハイ」のみであり、相づちは滞在期間が長い程表現も多く頻度も高くなるようだ。次は在住期間の最も長いMの場合の例である。

T: たか。違いましたか。

S: 違いました。

(29)は来日間もない初級学習者であるが、「ハイ」はTに対する応答の返事だと解釈できる。Sの「ハイ」という発話は、Tの「何をしましたか」と「先生に会いに行きましたか」という応答の求めがあったあとと、「試験でしたね」と「沢山時間がありましたね」という確認のポーズのあとである。これらは相づちとは言えない。もちろん文も短いので相づちを入れる間がないと言えるかもしれないが、一般に初級では殆ど相づちをうたない。(30)は同じ学習者の6か月後の対話である。Tの「読んだりしましたね」のあとのSの「ハイ、ソーデス」は明らかに確認の要求に応じた返事だと取れるが、その他の「ハイ」は「日本へ来る前に、思っていたと、思うんですけど、」など各文節毎に話し手の発話権中になされており、明らかに相づちと解釈できる。この学生は他の学生に比べて日本語の上達も早くコミュニケーション能力も高い。相づちの頻度も多く、タイミングもよいが、その種類は「はい」だけに限られている。しかし対話のしやすい流暢な例とだと言える。次は同じく中級の学生であるが、応答として以外は相づちを打っていない。

(31) T: Bさんは10年ぐらい前に日本に一度来ましたね。

S: ハイ、ソーデス。

T: じゃあ、その時に来た日本と、今、その時は休みで来たんですよ。勉強じゃなくて。

S: ソーデスネ。

T: その時の日本と、今留学生として来た日本とずい分違いますか。あなたの感じ。

S: ずいぶん違います。

(30)と(31)の違いは、前者の聞き手は話し手の発話権中にその各文節ごとに「ハ

う機能がある。話し手はその聞き手からのそういう合図をもとに自分の話を確認しながら進めている。従ってそういう発信がないと話し手は不安になる。聞き手は自分の話を一体どう思っているのだろうか。「あなたの話を聞いていますよ」という合図なしには、自分の話が空回りしているようで会話は発展しにくいのである。つまり、相づちは会話の進行を助ける重要な要素である。

相づちの機能は堀口氏^{#6}によると「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える」ということであるが、その共有の仕方は一通りではないとしている。

相づちの表現形式は個人によって異なり、その種類もさまざまではあるが、最も多いのが「ハイ」「ウン」「エエ」等の「聞いている」「理解している」を示すもの、「同意している」の意味での「ソウ」「ソウソウ」や否定の意味の「イヤ」等である。又、感情を表すものでは「へー」とか「ホウ」とか「ホント」等がある。出現位置はあくまでも「話し手が発話権を駆使している間」^{#7}であり、話し手が順番を譲った場合に聞き手が発したものは含まないというのが妥当であろう。頻度に関してはこれまでもいくつかの研究報告があるが、水谷信子^{#8}によれば、相づちの頻度は個人差や相手との関係や場面などによって違いがあるが、平均すると1分当たり15～20回であると言っている。

次の例は香りについてのラジオの対談で、CとDが談話形式で自由に話し合いをしている場面であるが、いかに多く相づちを打っているかということが分かる。（以下相づち詞と思われるものに関してはカタカナ表記で記す）

- (28) C：香りというのが動きと関係しているような気がするんですけど、
D： ウン ウン ウン
C：だから、おそらくどういう手法でなされているか分からないんですけど、香りを発生するというか、発揮する時に動きがないと、
D： エー エー ウーン
 ウン、ソウデスネ。あの、なんていうか、そうです。おっしゃったことに近いことは、例えば一つの建物に匂いがこもっちゃう。

(19) A：まだ一年ちょっとなのに，日本語お上手ですね。

K：いえ，そんなに上手じゃないんですけど。

(20) A：それはよかったですよ。

K：かもしれませんね。

(21) A：ご主人は何をしていらっしゃるんですか。

K：何もしていないんですよ。一応，英語を教えるにはいるんですけど。

又，文の中には日本人特有の幅を持たせた言い方，「何か～」「～かな」「じゃないか」等も頻繁に使われていた。特に日本在住期間の長いMの場合は頻繁にこの表現を使っている。以下はMの会話の中からの例である。

(22) かなり涼しい方ですよ。

(23) どちらかと言ったら，半々ぐらいではないかと私が思っているのは。

(24) 日曜日には友達に会ったりとか，それぞれ計画を立てているんです。

(25) 多い方がいいんじゃないかと自分では思っています。

(26) やはり，見方によってはと思いますけど。

(27) まわりの人に比べると，やはり何か違うと感じていたらしい。

3-6. 相づち

3-6-1. 相づち詞

対話を続けていく途上では，聞き手は話し手の話の内容を必ず相づちを打ちながら聞いていることに気づく。日本人の会話では相づちを打つのが普通である。相づちがないと話が続けにくい。相づちには「あなたの話していることはよく分かります。私も同感です」「どうぞ続けてください」又は「そういうこともあるのですか。驚きました」「それは少しおかしいのではありませんか」等と，聞き手の理解度や受けとめ方を話し手にそれとなく伝えるとい

教師はさまざまな言い換えによって話し手に発話をうながしているが、成功しない例である。初級の段階では、聞き取りもできず、語彙も覚えていないため仕方がないとしても、初級の終わりぐらいからは処理の仕方を学ぶべきであろう。対話が続かない例である。

K, H, Mの場合は日本人のアナウンサーと殆ど同じスピードで会話をしている。勿論無言、言いよどみ等もない。自分の言うことにつまった場合には無言で考えず、間を繋ぐためには次のような方策をとっている。

(17) A: 日本に来て最初に空港に降りた時に何か感じたことはないですか、
吃驚したこと。

K: う〜ん、吃驚したことですか……。あまりないんですけど。

(18) A: 日本に来て一番驚いたことって何ですか。

M: えーっとですね、一番驚いたことはですね……。

答えに滞った場合の対処の仕方として、「～のことですか」と聞き返しの形や「驚いたことはですね」と繰り返しをして間を上手に繋いでいる。

3-5. 幅をもたせた表現

日本語の会話の特徴として、幅をもたせた言い方をする傾向がある。自分の意見や考えを述べる場合、あまり直接的に表現することをせず、断定を避ける言い方である。例えば、「と思います」「と考えられます」「かもしれません」その他「ぐらい、ほど」などの表現である。「お茶でも飲みましょう。」「ディズニーランドとか行きたいなあ。」のような「でも」や「とか」などもそのたぐいである。また、「この前のことなんだけど……。」等、一度に全てを言わず少しずつ相手の話しをはさみながら話題を進行していく婉曲な言い方である。相手の気持ちを常に意識して話しを進めるやり方である

念頭に入れてくれて好意的に相手をしてくれる聞き手ならばよいが、聞き手の立場や状況では、時にはもどかしさを感じ、聞くことに疲れを感じさせられる。後者は、言葉と言葉の間が長すぎて、無言の時間が流れるケースであるが、これは会話では最も避けるべきことである。特に、語彙を思い出すのに時間がかかり、会話が途切れるため、聞き手の方もその語彙を模索してさまざまな言い換えや助言をしなければならない。それができる聞き手（例えば日本語教師等）や日本語を母語としない相手に慣れている対話者であればよいが、そうでない場合は談話はうまく進展しない。いずれにせよスピードが遅い、間が長すぎるのは流暢とは言えないケースである。語彙が分からなくても、言い方が分からなくても、何らかのやり方で即座に対応する術が必要である。次の(15)はごく初期の初級の学習者、(16)は中級初めの学習者の教師との対話である。

(15) T : Sさんは、今日、ランチに何を食べましたか。

今日のランチは、何を食べましたか。

S : ……………イエ……………ラウンジに

T : ランチ、ランチ、昼ご飯。何を食べましたか

S : ランチ……………ゴハン……………ゴハンヲたべまし……………

T : ご飯を食べました。ああ、そうですか。どこで食べましたか。

S : ……………

(16) T : 微生物工学ですね。どういうことをするんですか、それは。

S : ……………難しい……………微生物工学は……………

T : じゃあ、どういうことに役に立つんですか。そういうことをしたら。

S : ……………

T : いろんな微生物がありますね。微生物はどんな役目を持っている
ですか。どういう働きをしているんですか。

S : ……………

る。

また、一般に日本語母語話者が非母語話者と対談する場合は、当然相手の日本語能力をある程度念頭に入れて話すであろう。対話中に語彙が難解であるのではないかと感じた場合は相手に確認するのが普通である。K, H, M の場合もアナウンサーによる語彙の確認が数ヶ所で行なわれている。表情を見たり、問い掛をしたりして相手が分かったと察知した場合はそのまま続けるが、そうでないときとった場合は言い換えを行っている。

(12) A: これから冬になると熱燗, アツカン分かりますか。

k: 分かりません。

A: お酒を熱くして飲むの。

K: ああ, そうですか。

(13) A: 下町, 分かりますか。あの, いわゆる庶民的な町ですよ。

(14) A: つまり, なんか, やっぱり, せこせこしています? 一生懸命働
きすぎる。

上記の例では、アナウンサーが自分の言った語彙が難しいと感じて自ら言い直しをしたケースである。

3-4. 速度

速度にはゆっくりだが文が途切れることなく話す場合と、文がぶつ切れで間が長く、無言の時間が続く場合の2つのケースに分けられる。

前者は、自分の言いたいことを正確に一つ一つ話そうとして正確さに神経を使うあまりスピードが遅い。正確だがゆっくり話すタイプである。一般に一生懸命に話そうとしている態度が窺えて好感がもてるかもしれないが、これは聞き手の話し手に対する態度にかかっている。日本語能力の低いことを

地震のために強い材料を、強い……何と言いますか、elastic

T：はあ。

S：break ではなくて、強いです。

T：ああ、弾力性がある。地震に強い。

上記の例はSが語彙が分からず英語で言い換えて、相手にその語彙の理解を求めている。基本文型の枠の中に英語の語彙を入れてコミュニケーションを達成している例である。この学習者はフランス人ではあるが、媒介言語の分かる相手ならばこのような方法でコミュニケーションが可能である。

(10) S：steel と、いろいろな小さい、あその他の材料を入れる。特別のもの。

T：うーん、混ぜて作ったもの。特別な鋼，合成金属ですね。

上級の学習者でも、常に新しい語彙に接しては、その都度自分のものにしていく作業を繰り返している。日本人にとっても新しい言葉を取り入れる過程は同じである。ただ、日本人は既習の語彙の量が学習者に比べてはるかに多いため新語をそう一遍に覚える必要がないだけのことである。

今回のラジオのインタビューの3名も話の中に出てくる語彙、または自分の言いたい語彙を全体的確に言える訳ではなかった。Kの場合

(11) A：スリランカの普通の人の生活ってのはどうですか。国全体はどうですか。

K：日本と同じじゃないんです。お金がある人はあるんですけど、ない人はないんです。

これは「貧富の差がある」と言う語彙を初級の文型で上手に表現している例である。アナウンサーは対談の終わりの方でこのことに触れて「貧富の差がはげしいって言い方をね、さっきなさったんですけどね」とつけ加えてい

究分野の専門用語などが必要となる。語彙の知識は必要に迫られて習得することになるが、話の途中で相手の語彙が分からない場合、聞き返しをすることができる。又、適当な語彙が分からない場合は他の言葉で言い換えることもできる。語彙知識の不足は言い直しや聞き返しである程度解消できる。だれでも全ての語彙を習得しているわけではない。上手に聞き返しや言い直しができるれば、会話の展開には語彙不足の問題よりも、むしろ語彙につまった場合の処置の仕方が大きな問題となるのである。適当な語彙が見つからないことを相手に発信して助けを求めることをせず、ただ無言で自分の頭の中で模索したりすることは会話の流れを中断し、進行を妨げることになる。

実際問題として、学習期間中に必要語彙を全て覚えることは学習者にとって不可能に近い。必要語彙は個人によって異なるから、語彙の選択より文型の選択のほうが重要である。つまり、理解の上では、語彙の既習、未習よりも文型の既習、未習の方が問題なのである。未習の語彙が含まれていても、既習の文型を駆使して理解を可能にすることができるからである。この点ではまだ文型の学習が限られている初級の学習者にとっては十分なコミュニケーションが難しいということになる。

(8) T：昨日は何をしましたか。

S：手紙を書きました。

T：手紙を書きましたか。そうですか。どなたに？ 家族に？

S：……

T：Family

S：エー，ファミリー，エー，ファミリーに，書きました。

(8)は初級の初めの段階での教師とのQ-Aである。Sは家族という語が分からないためTが英語で言い換えをしている。次は中級の学習者である。

(9) S：地震があるから、あの、材料はとても大切です。

直しをして対処するのが普通である。

(7) S：あとう、先生、実は卒業してから、日本の会社に就職したいんですけど、あとう、推薦状を書かせていただけないでしょうか。

T：えっ、あなたが書くのですか。

S：ああ、(笑い)すみません。間違いました。推薦状を書いていただけないでしょうか。

T：はい、分かりました。(笑い) 私が書くんですよね。

上記の例は、依頼場面での謙譲の使役表現に誤った構文を使用した場合である。これは即座の言い直しによって支障なく会話は進行している。Sは相手の応答と表情によって自分の間違いに気づき自ら言い直した例である。

文構造の面では、まず初級段階で学習すべき項目（文型）を完全に習得していれば、普通の日常会話には困らない。K, H, Mに関して言えば、Kの場合は滞在期間がまだ1年あまりであるが初級の項目を完全に習得しているため、その文型を上手に使って言いたいことを言うのに成功している。Hの使っている文型も全て初級段階のものである。ただ、Mは滞在期間が長いこともあり、日本人との交流も多いことから文構造面ではかなり高度な表現を用いている。例えば、アフリカ出身のMは、よく日本人に「ライオンを見たことがありますか。」という質問を受けるが「私がライオンを見たのは、中学校の卒業旅行の時で、国立公園へ行った時に初めて見ました。」と言ったあと、「行かなかつたら、ライオン見ていなかったかも知れない」と上手につけ加えている。

3-3. 語彙

初級では日常生活に必要な語彙を習得することを目標としていたが、中・上級になると各分野に特有の語彙の習得が必要になってくる。例えば、ビジネスマンにはビジネスマンに必要な語彙があり、留学生の研究者にはその研

一応理解できる範囲内の発音ならば、それが意味の伝達に支障をきたさないかぎり許容すべきであろう。

K, H, Mに関しては、それぞれ発音の多少の個人的な癖はみられるが、上記のような発音上でコミュニケーションに支障をきたすようなものはなかった。

3-2. 文構造

通常、談話における文は短く単文が多い。あまり複雑な構文を使わなくても会話は可能である。従って複文構成の文を作れない構造面でかなり未熟な初級段階の学習者でも、対処の仕方によってはある程度会話を進めることができる。次の例は初級のごく初期段階の学習者の「私の国」と題するスピーチの言い出しの言葉であるが、複文構成が未習のため単文を重ねた言い方で対処している例である。

(5) S：皆さん、フィジー、どこにありますか。知っていますか。

「皆さん、フィジーはどこにあるか知っていますか。」というべきところを2つの単文で言っている。文は未熟であるが十分にコミュニケーションが行なわれている。次も複文が使用できずに単文で対処した例である。

(6) T：食品工学って、例えばどんな研究をしているのですか。

S：例えば、卵は落とせば壊れます。どうすればいいですか。

「卵を落としても壊れないようにする方法」と言いたいのであるが、単文の使用で対処しており、これも意味伝達に成功している例である。初級学習者でも、以上の2例のように単文を上手に組み合わせることによってコミュニケーションが可能である。又、中級後半の学習者でも構文の誤用をする場合があるが、自分が言った文の意味が通じないことを状況で察知したら、言い

(4) T：建物を建てる時にどんな金属を使ったらいいということですか。

S：特に日本には シュジンがいっぱいありますから。

T：シュ, シュ何?

S：シジン, シジン?

T：シジン? シジン?

S：シジン。

T：じしん, 地震。 (笑い)

S：じしん。(笑い)

地震があるから, あのう, 材料はとても大切です。

Tは地震という語彙が分かるまで2回の聞き返しをしている。(3)の例と同様文脈からも推測できる例である。

発音に関しては, 上記の3例でも分かるように①日本語としてカタカナ表記で定着している英語の語彙を英語的に発音するため理解しにくい場合, ②各学習者特有の母語の影響による発音の誤り③類似した語彙の発音時の間違い等である。流暢さの点から言うと, 発音上の誤解は会話の流れを一時的には中断してしまうが, 対話中に学習者が自分の発音の間違いに気づき, 対話者と共同でその矯正に努める場合が多い。上記3例はいずれも対話者の協力で発音が矯正された場合である。いずれも文脈や聞き直しで意味が通じており, 会話の進行にはあまり支障にはなっていない。日本人の会話の中でも耳新しい語彙に関しては同じような聞き直しや言い直しがなされている。

新しい語彙を授業の中ではなく教室外で, 例えば日本人の会話やテレビ, ラジオ等から聞いて覚えたり自分で辞書を引いて覚えたものについては, 語彙の意味そのものは間違いはないが発音に問題があって意味が通じない場合がある。

発音に関しては, もちろん母語話者と変わらない発音を習得できればそれに越したことはない。しかし学習者の発音を完全なものにすることは殆ど不可能である。又, どの程度でよしとするかというのも判断しがたい。そこで,

日本語学習者の談話展開における流暢さの要因（栗山）

T：レーザー？

S：ギジュツ，ギジュツ，レーザーギジュツ。

T：レーザー，ああ，レーザー。

S：レーザーテクノロジー，レーザーテクノロジーについて勉強します。

T：ああ，そうですか。レーザーの技術ですね。

Sはレーザーギジュツと言った時に「レーザー？」と聞き返されたので、ギジュツという言葉が分からなかったのだと思い、何度もギジュツを繰り返している。Tはギジュツという日本語は理解できたのであるが、問題はその前の語にある。レーザーと言う英語の発音は正しいのだが日本語の発音ではないということを学習者は気づいていない。レーザーという日本語の発音にもっていくまでにTとの理解に関してのやりとりがなされている。このような例は初級に拘らず中級以上にも多く見られる。

日本語として入っているカタカナ語はその元の言語，つまりこの場合は英語であるが，学習者はその英語の発音で言っているので分かりにくい。学習者は当然外国語として定着している日本語であるから日本人にも分かってもらっていると理解しているが，外来語は日本語のカタカナ語として学習し，発音もカタカナ表記のまま発音すべきである。

(3) T：専門は何ですか。

S：林業です。

T：林業ってどんなことするんですか。

S：林業の中で，ジョウリン。

T：ジョウリンああ，造林

上記の例はTが学習者の発音の欠点に慣れているために直ぐに理解できた例であるが，一般の日本人には分かりにくいかもしれない。ただ，林業の中の造林という文脈やトピックからもある程度推測できる例である。

あるかは課題として残されている。この違和感というものは、「日本人のように自然に」という目標に近づけば自然に無くなっていくものであろうことは推測できる。従って、この点を具体的に取り上げ究明していきたい。違和感の中には、非言語的な問題、つまり待遇的な問題、文化的背景の理解、状況判断等さまざまな要素が存在していると考えられるが、本論では話しことばという点で、音声面に表れた話し言葉の面のみについて述べる。

研究方法としては、3名の非母語話者の対話のやりとりを分析し、初級・中級段階の日本語学習者^{#4}の対話と比較し、どのような点が流暢さを妨げる問題点となっているか、又、流暢さの要因とは何かについて考察する。

例文における記号は、3名の非母語話者をK, H, M, ^{#5}アナウンサーをA, 初級・中級の学習者をSとし、教師をTとする。

3. 会話における学習者の問題点とその処理

日本語の会話の特徴である各技能を取り上げ、初級・中級・上級の学習者の問題点を指摘し、学習者が実際にどのようにその問題に対処して会話を続行し展開しているかについて実例をあげながら考察する。

3-1. 発音

話しことばについて述べる場合は、音声面の能力は最も大きな要素となっている。初級段階の正しい教育が重要であることは言うまでもない。初級のうちに正しい音の定着がなされておかなければ、中・上級になってからでは矯正がしにくく、いつまでも個人の癖として残ってしまいがちである。

次は、中級前半のTとSの対話である。(例文中問題点となっている発音はそれに近いカタカナで表記する)

- (2) T: あなたの専門について聞きたいんですけど。専門は何ですか。
S: わたしの専門は、リーザーギジュツ。

(1) S : 授業に出られなくなりました。

T : 困りましたね。

S : そうですね。^{#2}

教師の「困りましたね。」という言葉に対して、SはTの言葉に対する同意の意味で「そうですね」と応答した。この文は文の構造、表現の面においては誤用ではないが、応答としては不適切である。S自身のことに言及しているのであるから「そうなんです。」とか「はい、困っています。」とか言うべきで、応答がちぐはぐになっている。会話文の正否は文の結びつきという面からも判断されなければならない。問い掛け、回答に構成される連文形式は、話しことばにおいて最も一般的なものである。初級段階における従来の学習方法である問答法のQA練習は、質問に対する正しい返答、それに対してまた質問を繰り返すという訓練であった。しかし、最近は「談話練習」として、初級の段階からこういう誤用を避けるための練習方式がテキストにも取り上げられているのは望ましいことである。

2. 研究方法及び資料

ラジオ番組でのアナウンサーによるインタビュー形式で放送された3名の非母語話者(元日本語学習者)の対談を聞く機会があった。その会話の展開が全く日本人同士の会話と変わらず、自然なものであることに驚いたと同時に、どのような要因が何の違和感もなくすらすらと耳に響いてきて談話を楽しめたかという点に注目した。コミュニケーション能力の立場から言えば、中・上級レベルの学習者に求められる言語表現は、水谷信子氏の「一般の日本人と社会的な場面で違和感なくコミュニケーションができること」^{#3}ということであるが、3名の非母語話者に関しては全く違和感が感じられなかった。この点では到達目標に達している訳であるが、ただ、「違和感なく」という点に関しては曖昧さが残されており、違和感とは具体的にどのようなもので

等がある。スピーチは、日常会話と異なり、一人の人が話し続けなければならない。特に、公的な場合におけるスピーチは、大勢の人に興味を持って聞いてもらうために、予め内容を考え、筋立てを考えて準備を整えることと同時に話し方の効果的な技術をも身につけることが要求される。スピーチは事前に話す内容を一言一句すべて文字化しておき、周到な準備のもとに発音やイントネーションに注意をして本番に臨めば、それなりの到達目標に近づくことができるであろう。もちろん、本人の意見や話の内容等も大きな影響を持つが、スピーチに関しては、その成果を競う弁論大会等もあり、効果的方法等についての研究もなされている。

一方、会話や対話においては上記のような準備はできない。相手の話の運び方や出方によって、又はテーマに従って話は次々に変化していく。その内容を聞き取り、理解しながら常に自分の発話の内容を考えて話を運んでいかなければならない。話し手は同時に聞き手となる。相手の受け答えの仕方や表情、話の内容等から相手の知識や興味などを常に推測しながら会話は展開し進行していく。相手の発話を受けて即座に対応し発話をするという即戦力が必要とされる。ここでは一つの文が文法的に正しいか否かを判断することより、実はもっと重要なことは相手の発話に対する応答の文が適切か否かということにある。森田氏は、話しことば特有の性質として、談話には常に不確定要素が付きまとうことを述べ、「談話における問答形式では理解と表現とが、布の経糸と緯糸のように、いつも組み合わせられ一体となって一つの問答が形成されていくことに特徴がある。」と述べている。^{#1}又さらに談話の進行を一本の糸を紡いでいくようなものだと言っている。

初級の学習では、一般に文の構造、正しい文型の定着に重点がおかれる。しかし談話においては一つの文が構造的に正しくても、対話の応答として適切でない場合がある。応答の仕方に関しては挨拶のやりとり等での学習を除いては適切な指導があまり行なわれていないようである。例えば、次の例は授業を欠席する許可を教師に求める場面の中級程度の学習者との会話である。

日本語学習者の談話展開における 流暢さの要因

栗山昌子

1. はじめに

日本語の学習者の目標は、読む・書く・聞く・話すの四技能の中で、話す能力への希望が最も多い。初級レベルでは、先ず「話せるようになりたい」が一位であることは想像できるが、中級レベルの学習者も、その殆どが「日本語を上手に、流暢に話したい」を第一の目標としている。上手に話すということはどういうことであろうか。つまり、「日本人のように自然に話したい」ということであるが、「日本人のように」とは具体的にどのような話し方を意味しているのであろうか。

話しことばとは、一般に書きことばに対して用いられる。また、音声言語としての日常会話や自由な語りは総括して談話とも言われている。談話は英語では、discourse に当たり、いくつかの文が何らかのまとまりの言語表現となっているものを言う。通常、話しことば書き言葉の別は問わない。本論では、学習者が「話せるようになりたい」と言う、いわゆる話しことばを取り上げ、その中でも特に一対一の対話について考察する。

話しことばにはさまざまな形態があるが、対話や問答のように一対一で話し合うものと2, 3人以上が集まっての話し合い、つまり座談会や討議、会議のようなものがある。もう一つにはいわゆる一方的に話すスピーチのようなものがあり、それにはニュース、ニュース解説、講義、演説、説教、講演